



くすり博物館だより

〒483 岐阜県羽島郡川島町・内藤記念くすり博物館・Phone: 058689-3111

第9号

館蔵品展

くすりの錦絵広告

- 昭和57年5月1日～8月31日
- 当館3階特別展示場

スペースの関係上、日頃展示できずにやむを得ず保存庫に収蔵している錦絵広告類約200点のうち、60点を選んで上記特別展を開催してい

ます。前川潔、大槻彰、藤井康弘、小角薬局の各氏から寄託・寄贈されている懐かしい引札やポスターも含まれています。

動く広告

“びら・引札(ちらし)・錦絵広告”

江戸中期、貨幣経済の普及と同業者の増加につれ、単に商品を店頭で並べておくだけでは商売が行き詰まるころから、広告宣伝に新しい方法が生まれました。

「看板・のれん・広告行燈」など固定された広告に対して、いわば動く広告＝散らす広告とも言える「びら・引札・錦絵広告」がそれです。

肉筆の芸術的な浮世絵から、木版画による大量生産が可能な錦絵に移

新規の客を捕える積極的な宣伝手段行すると、画題も庶民受けするものが多くなり、そこにめざとく眼をつけたのが商人です。

明治中期に錦絵広告は最も盛んになりましたが、こうした大々的な宣伝ができるのは、まだ薬品と化粧品ぐらいのものでした。

テレビや雑誌などの有力なCM媒体の無かった頃、人々の憧れや関心に焦点をしばって、巧みな宣伝活動を展開したことがしのべられます。



▲「仙女香」 国貞画 江戸後期

三代目瀬川菊之丞の俳名が仙女で、それに因んだ白粉。江戸後期の有名な化粧品といえば、まず、この坂本屋の「仙女香」と、式亭三馬の「江戸の水」が挙げられる。



▲「金生丹」豊国画 江戸後期

祖父団十郎(俳名柏菴)より毛が3本足らないと、白猿を名乗った五代目市川団十郎は、隠居し簡素な生活をしていたが、晩年六代目の口上を勤め、狂歌を披露したことがある。気付け薬。



▲「枇杷葉湯売り」 国貞画 江戸後期

暑気払いの薬、枇杷葉湯はいわば江戸時代のドリンク剤。本家は京都烏丸、故に丸に烏の商標が薬箱にも見られる。歌右衛門、三十郎と地元関西の役者をうまく配している。

↓華やかな舞台、ひいきの役者、楽しい幕の内弁当、社交場と化す劇場。芝居見物は現代でも、雑誌やテレビ

などとは一味違った贅沢な娯楽です。江戸・明治の頃、芝居見物は一種の憧れでもあり、そういった人々の

心に着眼した広告が数多く生まれました。芝居の名場面や役者を使った錦絵広告がそれです。



▲「明治座興行」 国周画 明治30年

明治26年、初代左団次によって開場された明治座は日本橋浜町の下町に根を下ろし、人々に愛された。数店舗が共同で広告を出す、共同広告の形をとった錦絵広告。



▲「歌舞伎座興行」 国周画 明治30年

団十郎・菊五郎・左団次という明治の三大名優によって開場されて以来明治中期以降の演劇史上、重要な役割を担ってきた歌舞伎座の興行にのっとった共同広告。



▲「両やく見立競」 吟光画 明治12年

名役者と名薬を対比させたもの。異彩を放つのは中央上段の河竹新七（黙阿弥）と井（荷印ドンブリ）こと、いわしや市左エ門で、彼らは役者でも薬でもない、いわばそれらを操る人。黙阿弥は「真に江戸演劇の大間屋なり」と評されたし、いわしやも又、江戸随一の^{たいや}大店であった。



▲「千金丹」 国重画 明治13年

団十郎・左団次の扮する二人の千金丹売りが、娘（岩井半四郎）相手に、「千金丹」の効能を述べている。散切頭に洋傘と、明治初年の文明開化の流行がよく出ている。

↓^{げさくしや}戯作者の書いた引札

山東京伝を筆頭に、式亭三馬、十返舎一九、滝沢馬琴など劇作者の知名度と文章力を頼みに、引札書きを依頼することも多くありました。

↓岸田吟香(1835-1905)と精錡水

宣教師であり医師、語学者でもあったヘボン博士(米)の和英辞書編纂を助け、その返礼として点眼薬「精

錡水」の処方を受けられました。楽善堂という薬屋を開業する一方、東京日日新聞社を創始したジャーナリストとしても有名です。



◀「安産湯」 豊国画 江戸後期 山東京山述

難産や流産のくせのある人が用いれば、卓効ありと、口上を述べている。



◀楽善堂三葉「補養丸・鎮溜飲・穩通丸」精錡水

精錡水は、それまで専ら練り薬だった眼薬の中で、洋風の点眼水として大いに注目



◀楽善堂三葉「補養丸・鎮溜飲・穩通丸」精錡水

を集めた。「精錡」とは「チンキ」の意。

↓店舗広告

捨てるには惜しいような錦絵を使って上手に広告をしたのが、錦絵広

告ですが、店頭風景を画題としたものも沢山見られます。往来は賑やかで、客と番頭が商談をしています。

江戸時代の^{おたが}大店は店の構えや看板も立派ですし、文明開化以降には人力車やガス灯などが配されています。



▲信州東山堂本家看板の図 直政画 江戸時代



▲信州東山堂江戸出店の図 貞房画 江戸時代



▲(日野屋惣助)江戸出店の図 芳綱画 江戸時代



▲升屋(秋田)開店披露の図 明治初期



▲盛林堂(東京)の団扇絵 明治初期



◀「東京自慢名物会」 国周画 明治29年

当時の売れっ子芸者と人気のあった着物の柄ゆき、それに広告主である薬店とが、三位一体となった楽しく美しい続きもの。貼交絵ふうのバラエティー豊かな内容が面白い。(12枚)

↓新年引札

年末や正月に、顧客への挨拶まわりに携えていったもので、いわば宣伝を兼ねたサービス品です。錦絵広

告を継承するもので、初期は木版刷りですが明治30年頃から石版刷りが増え、量産されました。従来の錦絵広告のようなオリジナル物は少なく、

多くはできあいの絵に店名を後から刷り加える方式のため、単価も安く固定客確保に効果を挙げました。

▼曆や郵便料金表など付加価値のあるもの



▲貫誠社売薬
正月らしい風あげ、羽根つきの図案。松の内も過ぎれば、枕のかけ紙に用いたりして、決して安易に破り棄てられることはなかった。



▲関川宗徳
めでたい画題として、エビス・大黒は庶民に好まれた。



▲山崎勤業堂
宮本武蔵や浦島太郎などの説話入り引札は、破れた襖などに張られ、その内容をお爺さんが膝に抱いた孫たちに語り伝えた。



▲津村順天堂(部分)
明治39年の略曆が右下にある。



▲石黒薬館
右上に郵便料金表つき

↓ポスターへの移行



▲発汗水 明治後期



▲カイゼル膏 明治後期



▲三光丸



▲日本製薬



▲ハリバ



▲デシチン

新収蔵資料

＊洋々医館蔵書



江戸・長崎で医学を修めた近藤坦平は、明治5年郷里(愛知県碧南市)に洋式の診療所を建設。坦平の長男乾郎が院長となった明治45年には、同医館には伝染病棟、研究室、手術室、レントゲン室の各棟と近藤文庫の建物があつたといわれます。

このせっきくの遺産が突然壊され、驚いた隣に住む水野孝文氏が瓦礫の中から泥にまみれつつ図書を掘り出し、三河地方の医史学を調査中の安

とびっくす

▶年間来館者数約2万3千人

昨年度(昭和56年4月～57年3月)の来館者は、過去最高の22,620人。1日平均73人。開館以来のトータル178,834人(外国75ヵ国1,711人)と着実に伸び、来夏には20万人を突破しそう。

昭和53年に10万人、56年に15万人を越えて以来わずか2年程で20万人を突破できるのは、特別展などの活動が実を結んだものと思われま

▶徐国鈞教授の来館

日中生薬シンポジウムの一行70人が来館。前漢の馬王堆の墓から出土の中国最古の薬を鑑定した徐国鈞氏(南京薬学院)の顔も見られました。氏の業績は映画「くすりと日本人」でも取り上げています。

昨秋の医史学国際シンポジウム日



井広氏らの手で当館に運び込まれました。清掃の後、登録。坦平、乾郎らの蔵書232冊です。

＊賀来飛霞関係文書

幕末から明治にかけての本草学者、飛霞は尾張の伊藤圭介、美濃の飯沼慾斎とともに、本草の三大家と称された人です。東京の山下愛子氏から飛霞の研究資料(複写)を一括寄贈されました。登録整理には、まだ1～2年かかりそうですが、希望者の利用に供するという同氏の意向に添いたいと思います。

＊看板「人参三臈円」など27点。

昔、薬店だった池野光夫氏(愛知県知多市)宅で土蔵を壊す際、発見、上記の看板27点を譲り受けました。

この他、当館では宝丹流の筆跡も

珍しい「宝丹」など、16枚の看板を購入、現在看板の総数は343点となりました。

＊馬糞石(ヘイサラバサラ)

異国産の薬として「本草弁疑」などにも載っている馬の腸内の結石。真円に近く、しかも直径6.5cmと非常に大きい、珍しい資料です。川柳明氏(岐阜県羽島市)の寄贈。



＊南アフリカ共和国の医学の歴史書

南アのR. Levitt氏からA History of Medicine in South Africaを寄贈されました。

本大会に参加したDr. Crelin(米)も当館の評判をかねてより知り、訪日の機会にスケジュールを調整して来館。昨年度だけで34ヵ国182人の外国人が訪れています。

▶「くすりの錦絵広告」展の報道

岐阜テレビや朝日などの新聞各紙で紹介され、黄金週間には毎日200人近い家族連れで賑わいました。

先の特別展でも、「ズームイン/朝」など全国ネットでオンエア、かなりの反響がありました。



▶くすり博物館の見学案内書「くすりの博物誌(仮題)」の刊行準備中

従来のガイドブックを改訂、面目を一新することにしました。撮影・編集と作業が進んで今夏おめにかかけられます。

▶「いちのみや緑とくらし展」で一宮市に協力(4月29日～5月2日)

例年春の緑化月間の市民行事として開催される同展に、「身近な薬用植物」展の資料を貸し出し好評でした。この他、富山県、三重県、宮城県などにも館外貸し出しをしました。



▶人事消息

学芸員 永平麻実 ㊦付退職
司書 加藤靖子 ㊦付採用